

「家族がいること」

広島なぎさ中学校 3年 小糸真也

ぼくが幸せを感じる時は家族みんなが元気で一緒に暮らしている時です。

昨年、おばあちゃんが亡くなりました。ふだん一緒に暮らしているわけではありませんでしたが、とても近くにいて小さい頃からよく遊びに行っていました。ぼくが行くとおばあちゃんはいつも「いらっしやい」と笑って声をかけてくれました。それを聞くとぼくはいつもうれしくなりました。おばあちゃん家にいる時は一緒にテレビを見たり、カードゲームをしたりして楽しかったことを思い出します。おばあちゃんはぼくをとてもかわいがってくれました。家族が亡くなるという経験をしたのはおばあちゃんが初めてでした。

おばあちゃんは病気で八年も苦しみました。息をひきとった時、ぼくは研修旅行に行っていたのでそばにいてあげることができませんでした。でもそれは危篤であるおばあちゃんのためにぼくがずっと病院にいるよりも、きっと研修旅行に行くことを望むはずだと母が思ったからでした。ぼくはおばあちゃんに元気になってもらいたいと思って長寿のお守りを買って帰りました。でも、ぼくが戻った時はおばあちゃんはすでに亡くなっていて、お葬式も全て終わっていました。ぼくのそのお守りを見てみんなが泣きました。その時、ぼくはまだおばあちゃんが亡くなったということが信じられませんでした。でも、だんだん日が経つにつれておばあちゃんがいなくて寂しさがで心がいっぱいになりました。病気だった分、いつかはこういうことになるかもしれないとわかってはいたけれど、それでもこんなにつらいとは思いませんでした。ぼくは今までにない悲しみとおばあちゃんに何もしてあげられなかったという後悔が残りました。家族みんなが元気で一緒に暮らせることのありがたさを改めて感じました。だから、事故などで突然家族をなくしてしまったらどれほど悲しい気持ちになるか。一緒に暮らしていた家族がいなくなることがどれほどつらいことか。あたり前のように過ごしてきた日々があたり前じゃなくなった時、幸せであると感じる事ができないと思います。

ぼくには両親と二人の兄がいます。時々、うるさいと思うことがあったり、一人っ子だったら楽しいのになと思うこともあります。でも、いずれ両親も亡くなる日がくるし、兄たちとも別れる日がくると思います。家族みんなが暮らす日がずっと続くわけではないと思います。家族が元気であること、いろんな話をしたり、笑ったり、けんかしたり、そうやって過ごすことがぼくにとって本当に幸せなことだと気づかせてくれたのはおばあちゃんでした。だから、家族みんなが元気で一緒に暮らしている時がぼくにとって一番幸せを感じる時なのです。